

不安定な学校生活を送る生徒を支えるための教育的対応に関する考察

A Study on the Educational Approaches to Support the Students Who Lead Unstable School Lives

小山田 建太*

OYAMADA Kenta

Abstract

This paper clarifies how dropout predictive factors affected the students who dropped out in the first year, and what kind of “pull factor” there was for students who lead unstable school lives. Through this research, this paper aims to consider educational approaches to support them.

From the results of the analysis, the following three points were presented as points of consideration. First, since the dropout predictive factors were becoming risk factors at the stage when their dropout was close by, it is important that there is greater understanding of the influence of dropout predictive factors on students, who lead unstable school lives, based on their individuality. Especially in the period when the dropout predictive factors become high-risk, there is a need to understand their support needs and to seek flexible approaches for them.

Second, there is the possibility that the strong influence of dropout predictive factors in the first year will destabilize their school lives afterwards, and that the relationships and social resources which support students who have a high risk of dropout in the first year are relatively poor. Therefore, further investigation to reveal how they lead their school or social lives should be sought before expecting their school adaptation.

Third, it is confirmed that the significance of schools and teachers playing a role in supporting the students who dropped out in the first year or who lead unstable school lives will be particularly great if the actual conditions concerning them are taken into consideration. In other words, the educational approaches of teachers who accept the students who are at some disadvantage will prevent them from dropping out of high school, and make their school lives better, and furthermore, support their transition to adulthood.

* 職：筑波大学大学院・大学院生

1. 問題の所在と研究の目的

今日、多くの若者にとっての学校から社会への移行過程が複雑化・不安定化しており、これまで先進国に共通であった安定的な「成人期への移行」の型は、社会構造の転換に伴い流動化したと指摘されて久しい（宮本 2005）。またこのような現状のもとでは、既存の教育機関が子ども・若者の「成人期への移行」を支えていくことの重要性が高まっているといえ、なかでもその進学率が98.8%（文部科学省 2017）に上る高等学校等が、「大人へ移行するための土台づくり」を担う「最後の拠点」となる可能性がある（小野 2016, pp.301-302）。ゆえに、彼らが「高校に所属するというセーフティネット」（小野 2016, p.302）を強化する必要や、生徒の学校生活を不安定化させる、ひいては中退を誘発させるリスク要因に対して適切な対応を模索していく必要が考えられる。

またそのリスク要因については、高校生への追跡調査（パネル調査）による知見が非常に重要な示唆を提供している。竹綱ほか（2004）によれば、中退者が1年時に学校への満足感と、学級の凝集性認知を大きく低下させることから、これらがその中退予測要因として提示されている。加えて古賀（2014, 2015）は、都立高校中退者と進路未決定卒業生との「どんなことを経験できたから卒業できたか」の回答の比較から、学校や家庭の人間関係による援助の多寡がその中退／非中退を分かつ要因となっていたことや、一方でその中退者には規則正しい生活ができることの重要性が強く自覚されていたことを指摘する。そして彼らの中退要因について、「遅刻や欠席などが多く進級できそうになかった」などの回答からなる「生活リズム」因子がその他の項目全体（プライベート因子・人間関係因子・問題行動因子・学校外誘因因子）に強い影響を与えていたことから、彼らの「中退の背景には、出席や成績状況を左右し学校の日常から生徒を遠ざける、すなわち非学校化させる「生活リズム」の要因が大きくかかわっていた」（古賀 2017, p. 16）ことが推察されている。

上述のような知見を踏まえれば、不安定な学校生活を送る生徒が学校への帰属意識を示さなくなる場合にも、そのような傾向が立ち現れること背景として、彼らの「生活リズム」や、インフォーマルな人間関係の援助の多寡といった要因の影響をも想定しなければならないことが理解できる。

加えて高校中退のリスクは、1年時が最も高いことも一般に確認される。埼玉県教育委員会の「第4回 高等学校中途退学追跡調査」の結果を見れば、調査対象者の62.8%が1年時での中退を経験しており、中退のタイミングは経年的に見ても早期化していることがうかがえる（埼玉県教育委員会 2016, p. 43）。そして、国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センターの「高校生生活調査」によれば、中退者が1年時の1学期間に学校への肯定的な回答を示さなくなっていたことから、「高校中退の防止について、高校1年生の1学期間での働きかけがポイントである」ことが指摘されている（国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター 2017, p. 42）。これらの知見にも示されるように、多くの中退者が生み出される時期に着目することは、不安定な学校生活を送る生徒の動向を仔細に捉えることのみならず、さらなる効果的な教育的対応を考察する上でも大きな重要性をはらむものである。

しかしながらこれらの先行研究においても、不安定な学校生活を送る生徒へのより良い教育的対応を精査するに当たって以下の課題が残されているといえる。第1に、中退者がその学校生活のなかでこれらの中退予測要因の影響をどのように示していたのかについての経時的な検討がな

されていない。竹綱ほか（2004）は中退者一般の傾向を提示しているため、中退リスクの高い時期および生徒層に関する諸要因の影響の推移を詳細に確認できていない。また古賀（2014, 2015, 2017）や埼玉県教育委員会（2016）による知見は、中退者の過去の学校生活に関する回答に基づくため、さらなる実証化を試みるには、彼らの在学時における回答に着目し、それらの中退予測要因の影響の推移を把握していく必要があるだろう。

また第2に、中退リスクが高い生徒にとっての学校適応が促進される要因についても、より積極的な実証が試みられる余地がある。すなわち、中退者を対象とする調査により学校からの「プッシュ（疎外）要因」が示されるのみならず、中退者にも類似する不安定な学校生活を送る生徒がどのような学校への「プル（包摂）要因」の影響を受けていたのかを明らかにすることが、不安定な学校生活を送る生徒へのより良い教育的対応を考察することに特に重要な意義をもたらすと考えられる。

以上のような先行研究の課題より本稿のねらいは大きく2つあり、第1に、特に中退リスクの高い1年時に中退した生徒が、その学校生活のなかで中退予測要因の影響をどのように受けていたのかについて明らかにする。また第2に、そのような中退者にも類似する不安定な学校生活を送っていた生徒が、3年間の学校生活をどのように過ごし、またその卒業に至るまでにどのような「プル要因」の影響を受けていたのかを明らかにする。そしてこれらの作業を通して、彼らの学校生活を支えるための教育的対応を考察することを目的とする。

2. 使用するデータ

上記の課題から本稿では、国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センターの「高校生生活調査」データを活用する。本データは、ある都道府県1県の平成23年度高校入学者全員を対象に11回追跡調査を実施したパネルデータであり、中退者およびその中退時期も特定できるため、彼らが中退を目前とする時期でどのような学校生活を送っていたかを把握することも可能となっている。また以下の節では、各質問項目の「1. よくあてはまる」～「4. まったくあてはまらない」や、「1. よく話す」～「4. まったく話さない」の得点を反転させた分析結果を提示する。なおその他の質問項目や同調査の回収率等の詳細については、国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター（2017）の同報告書を参照されたい。

加えて本稿では、先行研究が示す学校への満足感や「生活リズム」因子といった中退予測要因を同データにおいて測定すべく、類似する質問項目から構成された「学校満足感」と「健康状態」の尺度を用いることとする（表1）。ここで「学校満足感」を構成する項目の α 係数は、全てのwaveにおいて0.87以上となり、「健康状態」の α 係数は0.88以上となることから、確かな内的整合性があると判断された。なおそれぞれ尺度得点は、尺度を構成する項目が1つでも無回答の場合、欠損値として処置した。

表1 「学校満足感」と「健康状態」の構成

| | |
|---------|---|
| 「学校満足感」 | wave1問7およびwave2～11問4の「ア・イ・エ・オ」の合計得点。4～16点の値を示す。 「高校に行くのが楽しい」、「高校生活に大きな期待がある」、「今の高校に入学してよかった」、「充実した高校生活が送れそうだ」と感じる程度。 ゆえに得点が高いと、「学校満足感」が高いことを示す。 |
| 「健康状態」 | wave1問7およびwave2～11問4の「カ・キ・ク・ケ・コ・サ・シ・ス」の合計32得点。8～32点の値を示す。 「いらいらする」、「身体がだるい」、「1つのことに集中することができない」、「不安を感じる」、「気持ちがむしゃくしゃする」、「泣きたい気分だ」、「体から力がわいてこない」、「頭が重い」と感じる程度。 ゆえに得点が高いと、「健康状態」が悪いことを示す。 |

3. 1年時に中退した生徒の学校生活の探索

3-1. 1年時の中退者の特定と分析の方針

本節では、特に中退リスクの高い1年時に中退した生徒が、その学校生活のなかで中退予測要因の影響をどのように受けていたのかについて明らかにしていく。

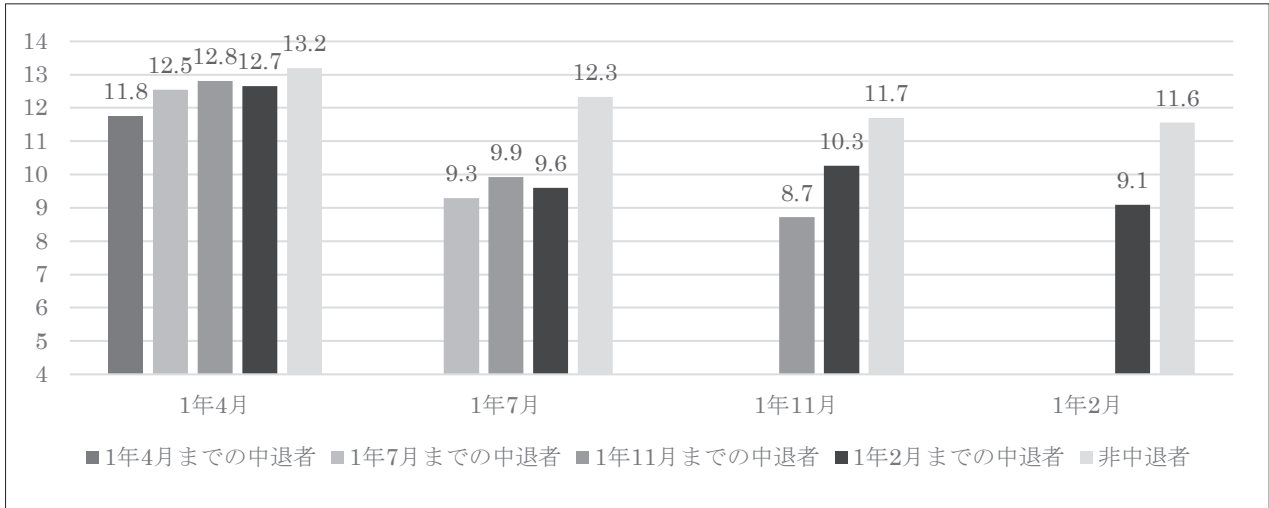
また本節で参照するのは、1年時のデータであり、1年時での回答を最後に中退に至った生徒(210人)が、その他の非中退者(12535人)と比較してどのような回答を示していたのかについて確認する。なお同データ上にて1年時の中退者(226人)は、3年間の全中退者(437人)のうちの51.7%を占めており、4月(wave1)まで回答した中退者は128人、7月(wave2)までの中退者は38人、11月(wave3)までの中退者は21人、そして2月(wave4)までの中退者は23人であった。¹⁾

以下では、彼らが中退を目前とする時期にどのような回答を示していたのかを明らかにするため、最後の回答が確認された時期別に中退者のグループ化をおこない、各グループの推移を非中退者の推移と比較させながら、確認していく。

3-2. 中退時期別にみる、中退者の「学校満足感」と「健康状態」

始めに、「学校満足感」(および同尺度を構成する「高校に行くのが楽しい」、「高校生活に大きな期待がある」、「今の高校に入学してよかった」、「充実した高校生活が送れそうだ」の各項目)は、中退者/非中退者間で最もその差が明確に表れる観点となっており、4月時点においても早期に中退に至った生徒ほど「学校満足感」が低くなっている。また中退者の「学校満足感」の喪失は時期の進行と明確に関連しており、非中退者に比較しても急速に失われていったことが見て取れる。そして彼らの「学校満足感」は、中退を目前とする段階で(例えば、7月まで回答した中退者は7月時点において)、最も低い水準となることも確認できる。

図1 1年時の中退者別の「学校満足感」の推移と、非中退者との差



重ねて、同様の傾向を「健康状態」(および同尺度を構成する「いらいらする」、「身体がだるい」、「1つのことに集中することができない」、「不安を感じる」、「気持ちが悪くしゃする」、「泣きたい気分だ」、「体から力がわいてこない」の各項目)の推移にも見ることができる。すなわち中退者の「健康状態」は、非中退者が7月以降一定の水準を保つことに反し、中退を目前とする段階で最も悪化していたことが確認できる。

図2 1年時の中退者別の「健康状態」の推移と、非中退者との差

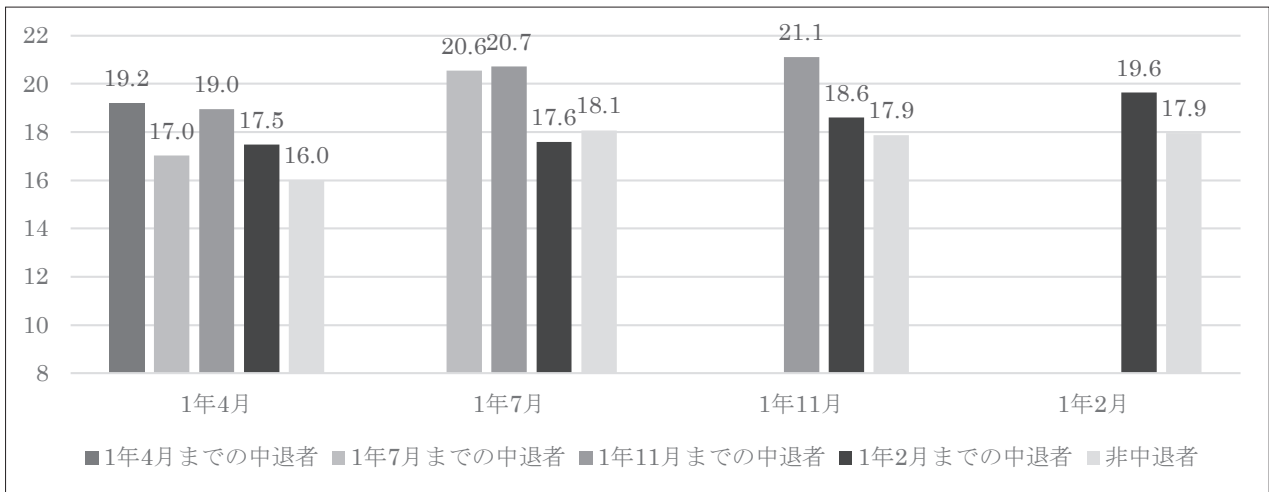


表2 「学校満足感」と「健康状態」についての各グループ間の差の検定(分散分析、t検定)

| | | 1年4月 (5群間) | 1年7月 (4群間) | 1年11月 (3群間) | 1年2月 (2群間) |
|---------|------|-----------------|--------------------------------|------------------|-----------------|
| 「学校満足感」 | F値 | 11.13*** | 23.78*** | 13.94* | 6.01** |
| | 多重比較 | 非中退者>1年4月までの中退者 | 非中退者>1年7月までの中退者、 1年2月までの中退者 | 非中退者>1年11月までの中退者 | 非中退者>1年2月までの中退者 |
| 「健康状態」 | F値 | 12.95*** | 3.54† | 3.44* | 1.80 |
| | 多重比較 | 非中退者<1年4月までの中退者 | なし | 非中退者<1年11月までの中退者 | なし |

***: $p < .001$, **: $p < .01$, *: $p < .05$, †: $p < .10$

※「多重比較」欄では、5%水準以下の有意差が認められたグループ関係を主に参照している。

このような結果を踏まえれば、1年時に中退した生徒が、非中退者と比較して「学校満足感」を持たず、「健康状態」が悪かったことが指摘できるものの、これらは彼らの中退が目前となる段階で明確にリスク要因化していたことが確認できる。なおこれらの傾向は、表2の統計的検定の結果からも理解しうるものとなっている。

3-3. 中退時期別にみる、中退者の話し相手

では1年時の中退者はその学校生活において、誰を話し相手としていたのだろうか。図3~7を概観すれば、多くの生徒たちが一般に「毎日の生活にとって楽しかったことやイヤだったできごと」を話すのは第一に「友人」であり、次に「家族」、「先輩」、「担任の先生」、「担任以外の先生」と続く。ただ一方で中退者には、「家族」が話し相手となりにくかったことが確認される。²⁾

併せて、彼らには「先輩」や「担任の先生」、「担任以外の先生」が相対的に話し相手となっていたことや、彼らの中退が目前となる段階で「友人」が話し相手でなくなっていた傾向などが想起されるものの、表3のような統計的検定の結果を踏まえれば、それらはあくまで「可能性」に留まるものであり、これ以上の解釈を加えることは難しいと考えられる。

図3 1年時の中退者別の「話し相手（家族）」の推移と、非中退者との差

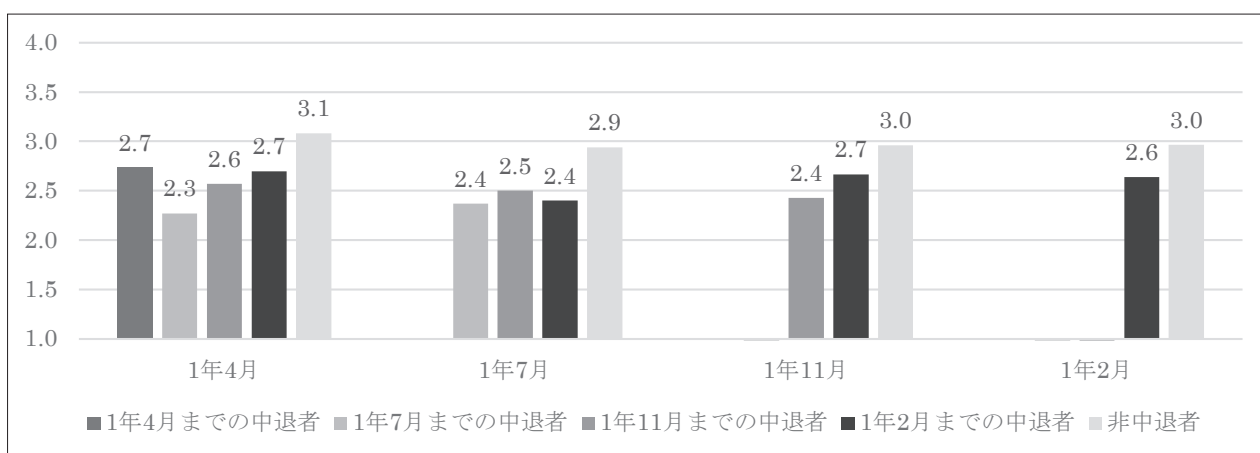


図4 1年時の中退者別の「話し相手（友人）」の推移と、非中退者との差

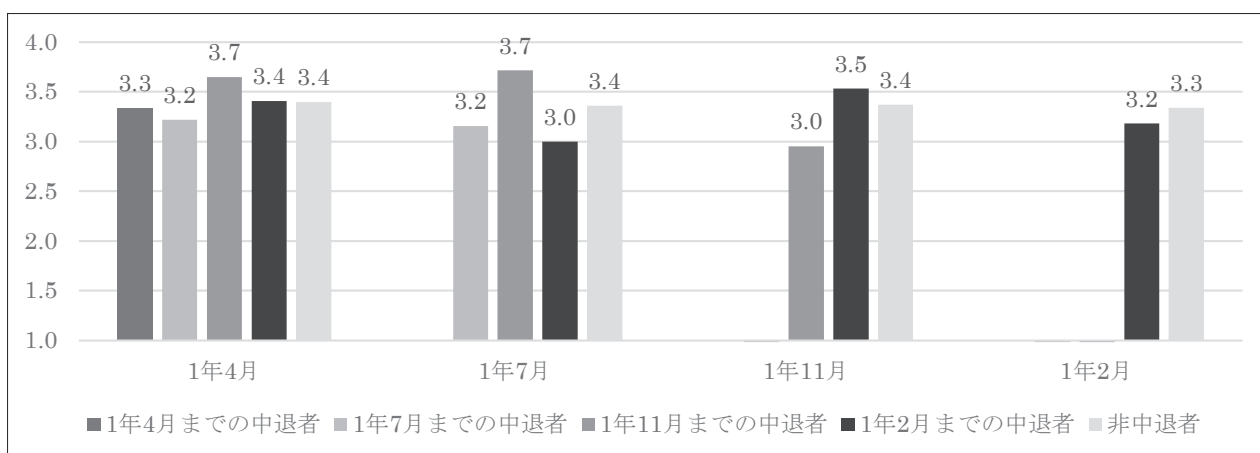


図5 1年時の中退者別の「話し相手（先輩）」の推移と、非中退者との差

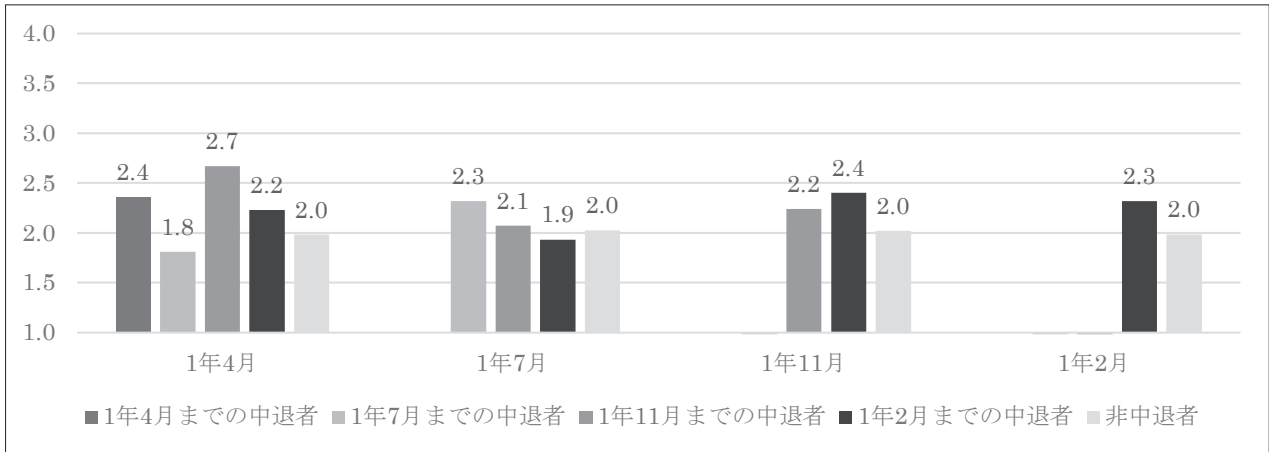


図6 1年時の中退者別の「話し相手（担任の先生）」の推移と、非中退者との差

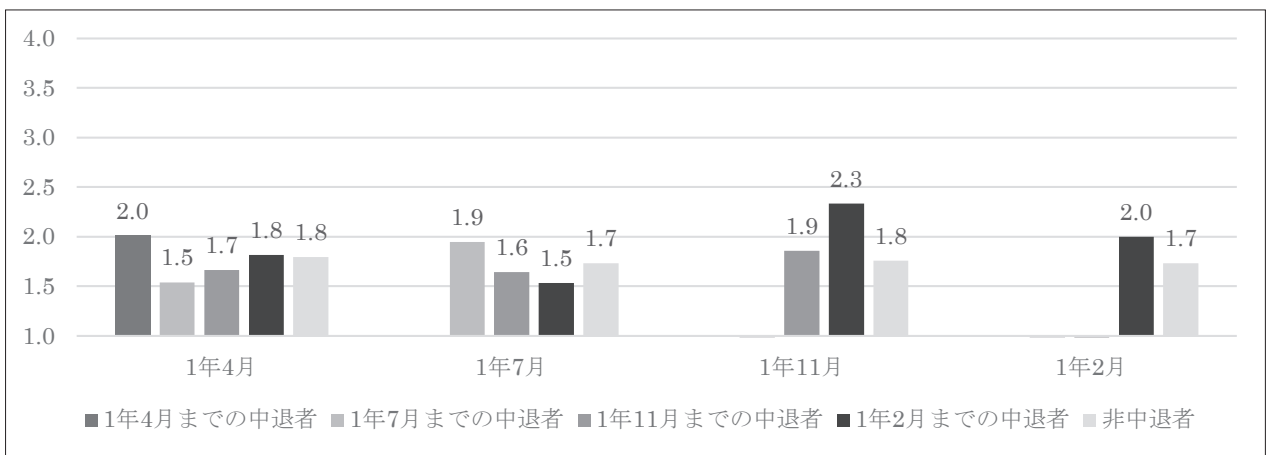


図7 1年時の中退者別の「話し相手（担任以外の先生）」の推移と、非中退者との差

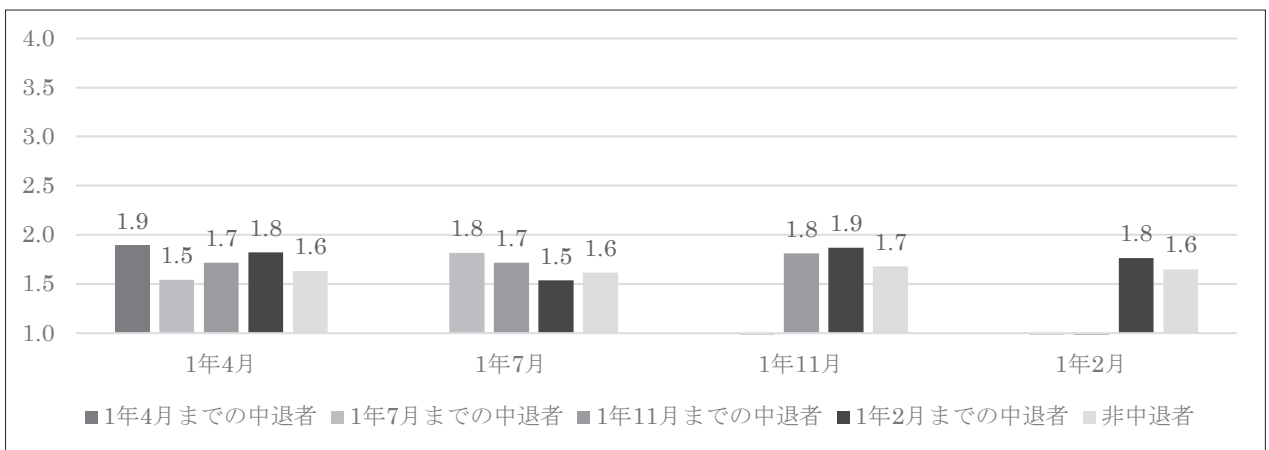


表3 「話し相手」についての各グループ間の差の検定（分散分析、t検定）

| | | 1年4月（5群間） | 1年7月（4群間） | 1年11月（3群間） | 1年2月（2群間） |
|-----------|------|--|--------------------------------|-------------------------------------|-----------|
| 「家族」 | F値 | 13.13*** | 6.82*** | 3.84* | 3.20 |
| | 多重比較 | 非中退者>1年4月までの中退者 非中退者>1年7月までの中退者 | 非中退者>1年7月までの中退者 | 非中退者>1年11月までの中退者 | なし |
| 「友人」 | F値 | 1.25 | 2.89† | 3.35 | 2.65 |
| | 多重比較 | なし | 1年7月までの中退者>1年11月までの中退者(※10%水準) | 1年2月までの中退者、非中退者>1年11月までの中退者(※10%水準) | なし |
| 「先輩」 | F値 | 8.88*** | 1.23 | 1.71 | 4.97 |
| | 多重比較 | 1年4月までの中退者、1年11月までの中退者>非中退者 1年4月までの中退者、1年11月までの中退者>1年7月までの中退者 | なし | なし | なし |
| 「担任の先生」 | F値 | 3.74** | 1.45 | 4.28 | 0.02 |
| | 多重比較 | 1年4月までの中退者>1年7月までの中退者、非中退者 | なし | なし | なし |
| 「担任以外の先生」 | F値 | 4.73* | 1.11 | 0.74 | 0.50 |
| | 多重比較 | 1年4月までの中退者>非中退者 | なし | なし | なし |

***:p < .001, **:p < .01, *:p < .05, †:p < .10

※「多重比較」欄では、5%水準以下の有意差が認められたグループ関係を主に参照している。

4. 中退リスクが高かった生徒の3年間の学校生活の探索

4-1. 中退リスク群の特定と分析の方針

次に本節では、中退した生徒にも類似する不安定な学校生活を送りながらも卒業に至った生徒が、その3年間の学校生活をどのように過ごしていたのかについて、また彼らの学校生活にはどのような「プル要因」の影響があったのかについて、明らかにしていく。

また本節で参照するのは、1年時において中退者と同程度、あるいは中退者以上に「学校満足感」が低く、「健康状態」も悪かった生徒であり、具体的には、1年時の4時点のうちで1度でも、「学校満足感」が8点以下でありかつ「健康状態」が22点以上であった経験を持つ非中退者を、「中退リスク群」(1822人)として抽出した。

以下では、彼らの3年間の学校生活をその他の非中退者である「非リスク群」(10713人)と比較して分析していく。なお1年時に中退リスク群と同様の「学校満足感」と「健康状態」を示した生徒は、その他の生徒と比較して1年時の中退率が1.38倍高く、また3年間での中退率は1.83倍高くなっていた。

4-2. 中退リスク群の生徒の「学校満足感」と「健康状態」の推移

始めに、中退リスク群の生徒の「学校満足感」や「健康状態」が、3年間でどのような推移を辿っていたのかについて確認する。図8・9を見ると、中退リスク群の「学校満足感」や「健康状態」は1年時の2月(wave4)において最も危険な水準に達しながらも、2年時の4月(wave5)以降徐々に良好なものとなっていき、3年時の11月(wave11)までに非リスク群の水準に近づいていったことが見て取れる。しかしながらその差は、3年間を通して一定程度開いており、中退リスク群の水準は1年時に中退した者の水準(図内の破線)とも同程度であったことが図からはうかがえる。これらより、彼らが1年時に経験した学校生活の不安定さは、3年間のうちに解消されるには至らなかったことが推察できる。なおt検定の結果より、図8・9の全ての時点において0.1%水準の有意差が認められた。

図8 中退リスク群と非リスク群の「学校満足感」の推移（3年間）

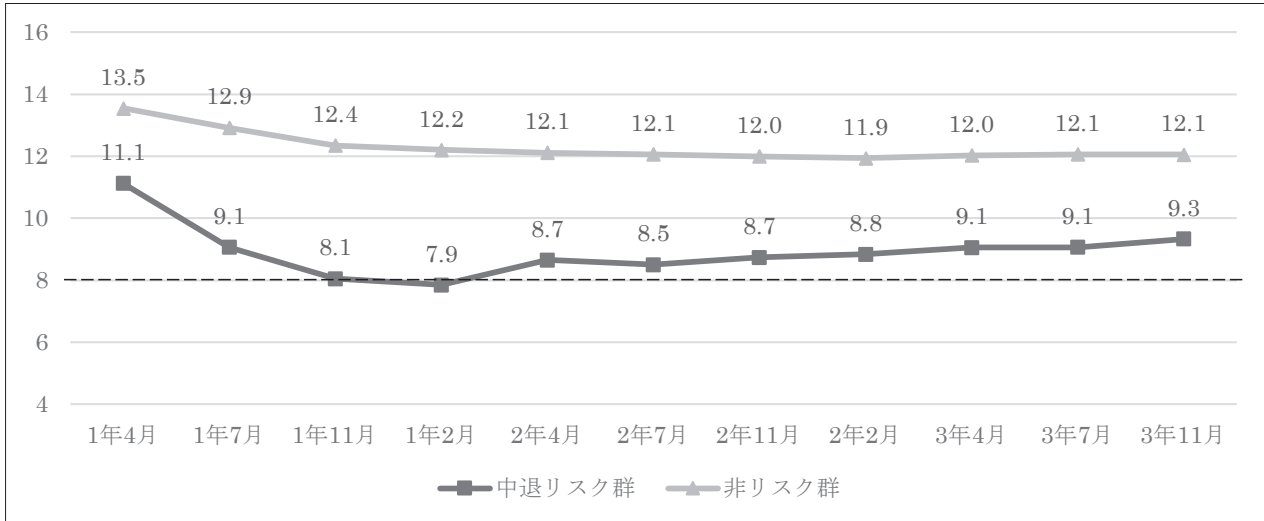
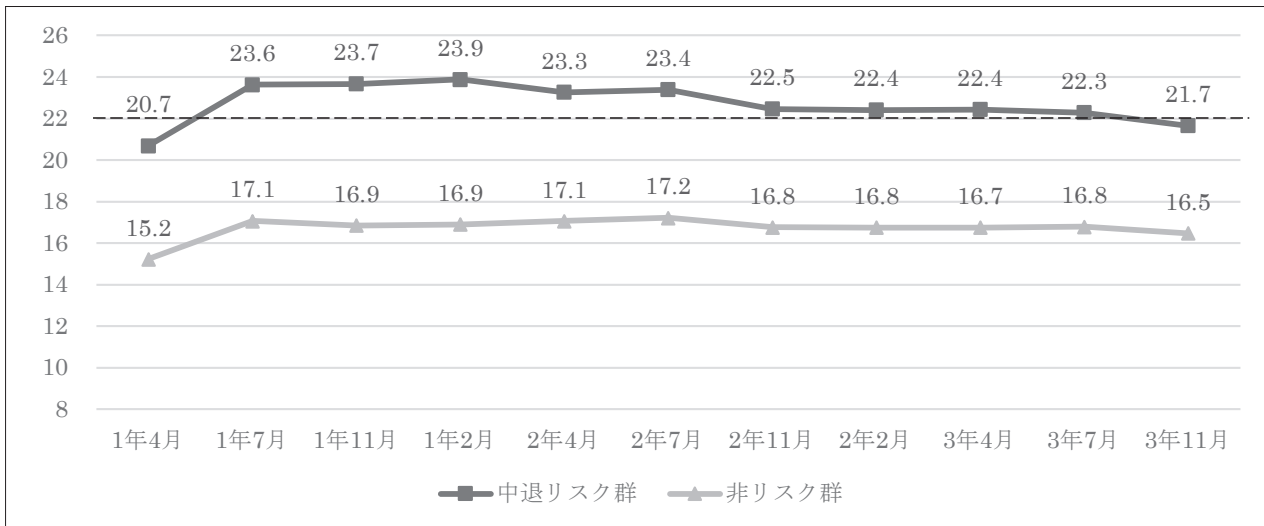


図9 中退リスク群と非リスク群の「健康状態」の推移（3年間）



4-3. 中退リスク群の生徒の話し相手の推移

次に、中退リスク群は3年間の学校生活において、誰を話し相手としていたのだろうか。図10～14よりその推移を見れば、多くの生徒たちにとって「友人」や「家族」が、「先輩」や「担任の先生」、「担任以外の先生」と比較しても、特に重要な話し相手となっていたことが分かる。しかしながら中退リスク群は、非リスク群と比較して「友人」や「家族」を話し相手とする頻度が少なく、図10・11においても両群のポイント差が明確に表れている。なおt検定の結果より、「先輩」の推移（図12）において3年4・7月の時点で1%水準の有意差が、11月時点で5%水準の有意差が認められ、その他の推移の全ての時点において0.1%水準の有意差が認められた。³⁾

図 10 「話し相手（家族）」

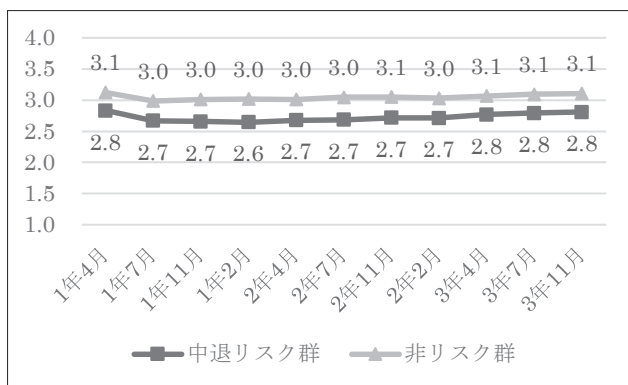


図 11 「話し相手（友人）」

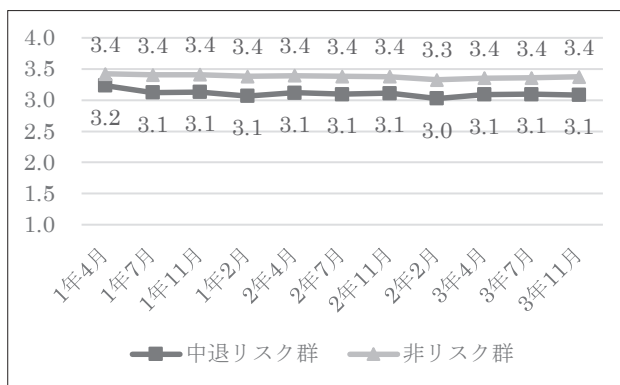


図 12 「話し相手（先輩）」

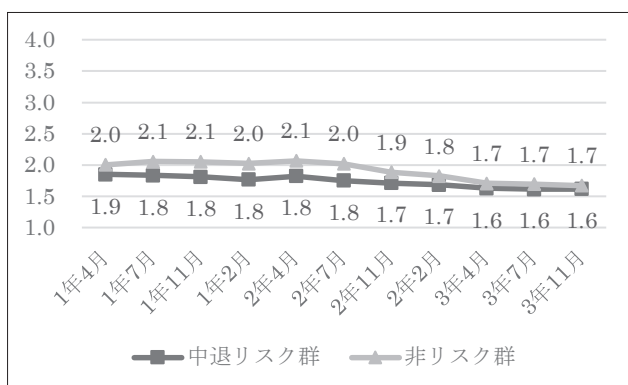


図 13 「話し相手（担任の先生）」

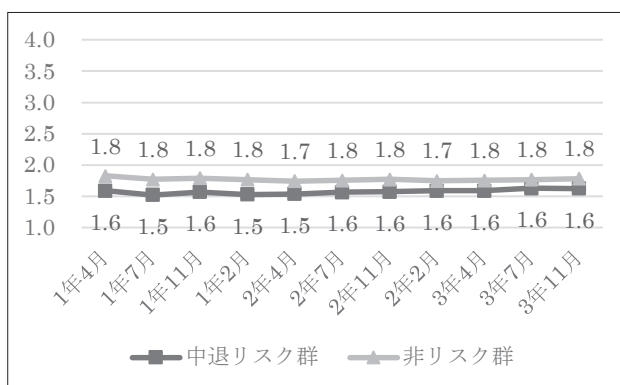
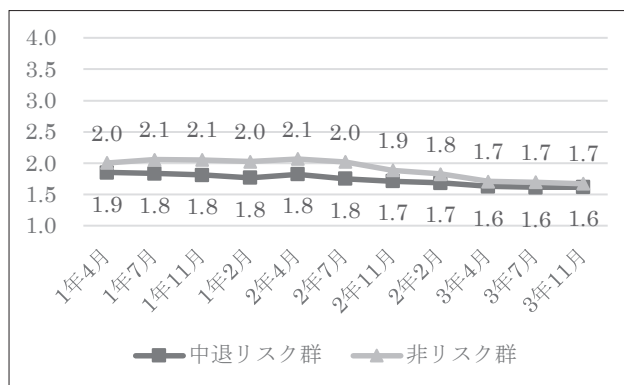


図 14 「話し相手（担任以外の先生）」



4-4. 中退リスク群の生徒は学校生活をどのように振り返ったのか

それでは中退リスク群の生徒は、その3年間の学校生活をどのように振り返っていたのだろうか。そこで図 21～25 より「この1年間を振り返った今の気持ち」の3年間の推移を見れば、中退リスク群の生徒による回答は、一貫して非リスク群による肯定的な回答の水準を下回りつつも、学年が上がるにしたがって、その肯定的な認識を非リスク群以上に高めていったことが確認できる。またここで特にその差が縮小する項目は、「充実した高校生活だった」、「期待以下の高校生活だった」、「今の学校に入学してよかった」であり、非リスク群にも似た推移が示される項目は、「自分の将来について具体的に考えるようになった」、「自分の夢の実現に向けて努力するようになった」である。なおt検定の結果より、図 15～19 の全ての時点において0.1%水準の有意差が認められた。

図 15 「充実した高校生活だった」

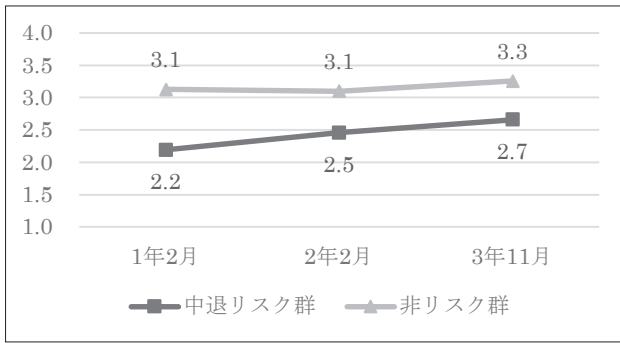


図 16 「期待以下の高校生活だった」

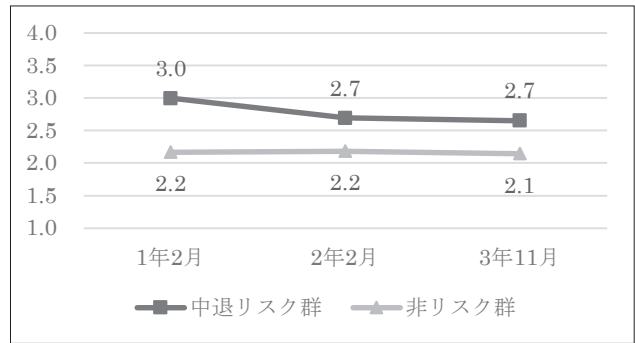


図 17 「今の学校に入学してよかった」

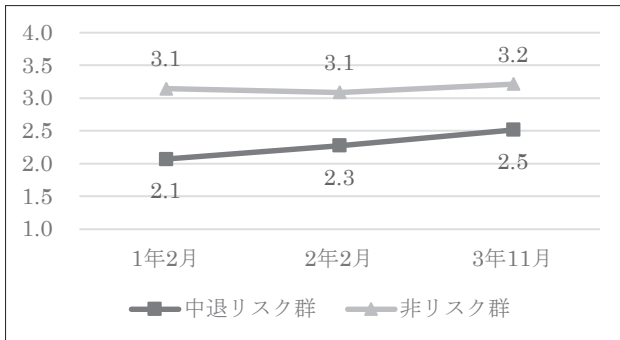


図 18 「自分の将来について具体的に考えるようになった」

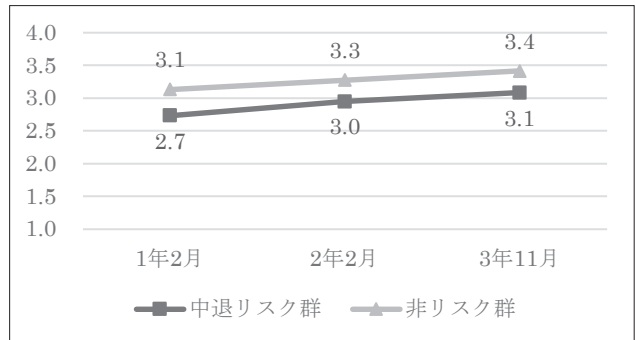
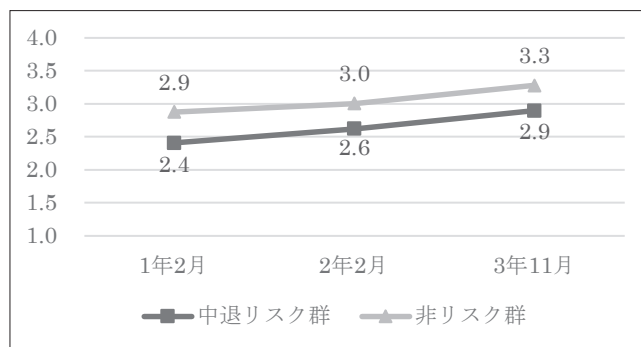


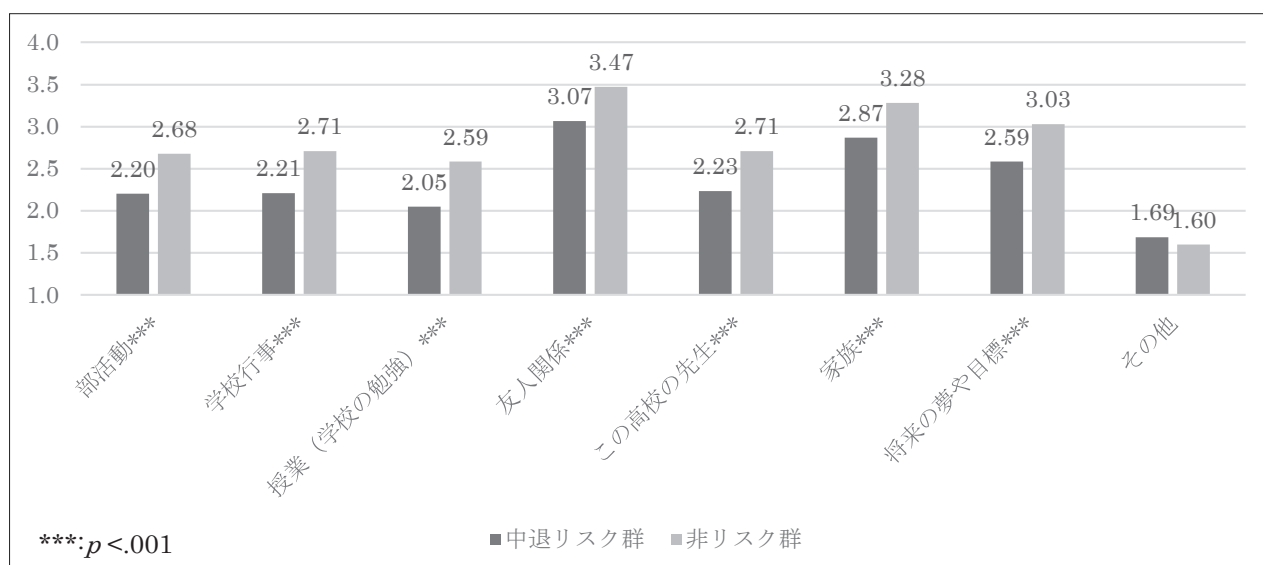
図 19 「自分の夢の実現に向けて努力するようになった」



4-5. 誰（何）が、中退リスク群の生徒の学校生活に影響を与えていたか

それでは中退リスク群の肯定的な回答は、どのような要因によって引き出されていたのだろうか。以下の図 20 は、中退リスク群と非リスク群の「この3年間を振り返って、ここまでやってこれたのは、誰（何）のおかげ（支え）だったと思いますか」⁴⁾ についての回答の差を示している。

図 20 中退リスク群／非リスク群の、「この3年を振り返って、ここまでやってこれたのは、誰（何）のおかげ（支え）だったと思いますか」の差



これより、多くの生徒たちの支えとなっていたのは第1に「友人関係」であり、次いで「家族」、「将来の夢や目標」、「この高校の先生」、「学校行事」、「部活動」、「授業（学校の勉強）」、「その他」と続くことが見て取れる。だが中退リスク群は非リスク群と比較して、3年間の学校生活が「誰（何）のおかげ（支え）だった」とは相対的に感じられていなかったことがうかがえる。

またこの結果に重ねて、彼らの学校生活を特に大きく左右させていたのは、誰（何）だったのだろうか。そこで以下では上述の質問項目と、3年時11月（wave11）での「学校満足感」や「健康状態」との相関分析の結果を、中退リスク群と非リスク群のそれぞれについて確認する。

そして表2・3を見れば、3年間の学校生活をやってこれたのは「誰か（何か）のおかげ」であると感じていた生徒ほど、3年時11月での「学校満足感」が高く、「健康状態」が良好であったことが確認でき、特に彼らの「学校満足感」には「この高校の先生」や「授業（学校の勉強）」、「学校行事」などの相関が総じて強く表れている。しかしながら中退リスク群と非リスク群の反応の傾向はそれぞれ特徴的であり、まず「学校満足感」について、非リスク群が「友人関係」(.427)や「家族」(.350)などの相関をより強く示すのに対して、中退リスク群は「この高校の先生」(.511)や「授業（学校の勉強）」(.486)、「学校行事」(.482)、「将来の夢や目標」(.400)などの相関をより強く示している。次に「健康状態」について、非リスク群が「家族」(-.149)や「友人関係」(-.148)、「授業（学校の勉強）」(-.129)、「学校行事」(-.110)などの相関をより強く示すのに対して、中退リスク群は「この高校の先生」(-.139)の相関をより強く示している。

表4 非リスク群の「学校満足感」「健康状態」と、「この3年間を振り返って、ここまでやってこれたのは、誰（何）のおかげ（支え）だったと思いますか」との相関分析

| | 部活動 | 学校行事 | 授業 (学校の 勉強) | 友人関係 | この高校の 先生 | 家族 | 将来の夢 や目標 | その他 | |
|---------|------|-----------|-------------------|-----------|-------------|-----------|-------------|-----------|----------|
| 「学校満足感」 | 相関係数 | .266 *** | .451 *** | .455 *** | .427 *** | .490 *** | .350 *** | .369 *** | .064 ** |
| | 度数 | 6718 | 6717 | 6706 | 6724 | 6699 | 6692 | 6688 | 1485 |
| 「健康状態」 | 相関係数 | -.052 *** | -.110 *** | -.129 *** | -.148 *** | -.109 *** | -.149 *** | -.098 *** | .144 *** |
| | 度数 | 6698 | 6697 | 6686 | 6705 | 6680 | 6673 | 6669 | 1479 |

***: $p < .001$, **: $p < .01$

表5 中退リスク群の「学校満足感」「健康状態」と、「この3年間を振り返って、ここまでやってこれたのは、誰（何）のおかげ（支え）だったと思いますか」との相関分析

| | 部活動 | 学校行事 | 授業 (学校の 勉強) | 友人関係 | この高校の 先生 | 家族 | 将来の夢 や目標 | その他 | |
|---------|------|----------|-------------------|----------|-------------|-----------|-------------|----------|------|
| 「学校満足感」 | 相関係数 | .277 *** | .482 *** | .486 *** | .391 *** | .511 *** | .291 *** | .400 *** | 0.04 |
| | 度数 | 1126 | 1128 | 1128 | 1130 | 1127 | 1127 | 1126 | 296 |
| 「健康状態」 | 相関係数 | -.082 ** | -.082 ** | -.081 ** | -.099 *** | -.139 *** | -.005 | -.085 ** | 0.08 |
| | 度数 | 1126 | 1128 | 1127 | 1129 | 1126 | 1126 | 1125 | 297 |

***: $p < .001$, **: $p < .01$

5. まとめと考察

以上より、本稿の分析結果は以下の5点にまとめられる。第1に、中退予測要因となる「学校満足感」や「健康状態」は、特に中退が目前となる段階で明確にリスク要因化していた（図1・2）。

第2に、1年時の中退者は「家族」を相対的に話し相手としていなかったことが確認されつつも、他に彼らにどのような話し相手がいたのかについては、その中退時期との関連をも含め、さらなる検討を加える余地が残された。（図3～7）。

第3に、中退リスク群の生徒の「学校満足感」や「健康状態」は2年時の4月以降、非リスク群の生徒の水準に近づいていたが、その差は3年間を通して一定程度開き続けていた。また中退リスク群の生徒による「学校満足感」と「健康状態」の推移の水準は、1年時の中退者の水準とも同程度であった（図8・9）。この結果は、彼らの学校生活を捉えるに当たり、1年時の「満足感」や「健康状態」には細心の注意を払う必要があることを追認させるものとなっている。

第4に、多くの生徒たちにとって「友人」や「家族」が特に重要な話し相手となっていたなかで、中退リスク群の生徒は非リスク群の生徒と比較して、3年間を通じて「友人」や「家族」が話し相手とする頻度が一貫して低く（図10～14）、またその3年間の学校生活が「誰（何）のおかげ（支え）だった」とも相対的に感じられていなかった（図20）。

第5に、しかしながら中退リスク群の生徒は非リスク群の生徒に比較して、低水準ながら3年間の学校生活をより肯定的に振り返るようになっており（図15～19）、彼らの「学校満足感」や「健康状態」には「友人」や「家族」の相関が総じて弱く、一方で「この高校の先生」の相関が総じて強く表れていた。加えて、両群に比較的強い相関を見出せた「授業（学校の勉強）」や「学校行事」、「将来の夢や目標」といった項目は、中退リスク群の生徒の「学校満足感」にはより強い関連を示しつつも、「健康状態」にはより弱い関連を示していた（表4・5）。

そして以上の知見を踏まえ、本稿では大きく3点の考察を提示する。まず第1に、これまで先行研究では生徒の学校への満足感（竹綱ほか 2004）や「生活リズム」、そして学校や家庭の人間関係による援助の多寡（古賀 2014, 2015, 2017）が彼らの中退予測要因となることが指摘されてきたが、本稿の知見よりこれらの中退予測要因は、彼らの中退が目前となる時期において特にリスク要因化することが確認された。したがって中退予測要因が不安定な学校生活を送る生徒に及ぼす影響については、より彼らの個別性にもとづく配慮が求められなければならない、特にそれらがリスク要因化する時期にこそ、彼らの支援ニーズを捉え、柔軟な対応を模索していく必要がある。

また第2に、1年時に中退した生徒と1年時に中退リスクが高かった生徒に関して、彼らの「学校満足感」や「健康状態」がその他の生徒に比べて一貫して優れず、「友人」や「家族」といった重要なインフォーマントも話し相手とする頻度が低く、また3年間の学校生活が「誰（何）のおかげ（支え）だった」とも感じられない傾向にあったことから、1年時での中退リスクがその後の学校生活をも不安定化させる可能性や、彼らを支える人間関係および社会資源が相対的に乏しい可能性を考えることができる。ゆえに彼らの学校適応を期待する場合には、まず何より彼らがどのような生活世界を過ごしているのかについて、さらなる把握を追究する余地が残されているといえる。

そして第3に、先行研究の主な成果は中退予測要因の実証に大きく焦点づけられてきたため、不安定な学校生活を送る生徒にとっての学校への「プル（包摂）要因」が直接的に実証されてこなかったが、中退リスクが高かった生徒にとって3年間の学校生活が、彼らの充実感や将来への希望を育んでいたことが示された。加えて彼らの「学校満足感」や「健康状態」には、「この高校の先生」の影響が強く表れることも確認された。なおこのような影響は、生徒群によって反応に差が表れる「授業（学校の勉強）」や「学校行事」、「将来の夢や目標」による影響とも異なり、かつ中退リスク群の生徒には比較的関連の弱い「友人関係」や「家族」による影響とも対照的である。

以上の考察をまとめれば、不安定な学校生活を送る生徒を支えることに果たす学校および教師の意義は特に大きいものとなることが理解できる。もちろん、中退リスクの高い生徒を排除しうる学校の構造や、不安定な生徒の「学校満足感」および「健康状態」に教師が強い影響を与えうる可能性については再度留意する必要があるが、同時に、彼らの学校生活を支えうる人間関係や社会資源の実態を看過するべきではないだろう。すなわち、いくらかの不利を背負いながら不安定な学校生活を送る生徒を教師が受容できることが、彼らの高校中退を防ぎ、その学校生活をより良いものとするはずであり、そしてそのことを通じて、彼らが「大人へ移行するための土台づくり」が実現していくのではないだろうか。

なお最後に、本稿の課題や限界性として、分析対象とした生徒たちが持つ社会経済的状況との関連を確認しきれていないことが挙げられる。すなわち上述の知見を踏まえれば、そもそもなぜ一部の生徒の「学校満足感」や「健康状態」が低かったのかについて、あるいは、なぜそのような生徒が重要なインフォーマントとなりうる「友人」や「家族」を頼らなかったのかについて、その動的なプロセスを把握する課題が残されている。加えて、より具体化された教育的対応の在り方に迫るには、学校種や生徒層などをより規定した議論も重要となるだろう。これらの研究の蓄積が、今日の多様な高校生への教育的対応の意義と課題をより鮮明に映し出すものとなると考えられる。

参考文献

- 古賀正義, 2014, 「液状化するライフコースの実証的分析—都立高校調査からみた中途退学者の意識と行動—」『教育学論集』第 56 集, pp. 21-64.
- , 2015, 「高校中退者の排除と包摂—中退後の進路選択とその要因に関する調査から—」『教育社会学研究』第 96 集, pp. 47-67.
- , 2017, 「定時制高校における中退問題の実証的分析—補償と排除の間で—」『教育学論集』第 59 集, pp. 1-30.
- 国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター, 2017, 『高校中退調査報告書—中退者と非中退者との比較から見えてきたもの—』.
- 宮本みち子, 2005, 「先進国における成人期への移行の実態—イギリスの例から—」『教育社会学研究』第 76 集, pp. 25-39.
- 文部科学省, 2017, 「平成 29 年度 学校基本調査 (確定値)」.
- 小野善郎, 2016, 「「移行支援」としての高校教育」再論」小野善郎・保坂亨編著, 『続・移行支援としての高校教育—大人への移行に向けた「学び」のプロセス—』福村出版, pp. 278-304.
- 埼玉県教育委員会, 2016, 『第 4 回 高等学校中途退学追跡調査結果報告書』.
- 志水宏吉・伊佐夏実・知念渉・芝野淳一, 2014, 『調査報告 「学力格差」の実態』岩波書店.
- 杉江修治・清水明子, 2000, 「高校中途退学研究の動向と課題」『中京大学教養論叢』第 41 巻第 1 号, pp. 923-941.
- 杉山雅宏, 2011, 「高等学校中途退学に関する文献研究—研究の動向と今後の課題—」『東北薬科大学一般教育関係論集』第 24 巻, pp. 1-36.
- 竹網誠一郎・鎌原雅彦・小方涼子・高木尋子・高梨実, 2004, 「高校中退予測要因の継時的研究」学習院大学『人文』第 2 巻, pp. 103-109.

注

- 1) なお同調査に 1 度も回答することなく中退した生徒 18 人はデータが確認できないため、分析から除外した。重ねて、2~3 年時に中退した生徒 (211 人) のうち、2 年時以降の回答が 1 度も確認できない生徒 (103 人) の割合は 48.8% となっており、学校に親和的でない生徒の学校生活を把握することの困難性が示唆される結果となった。
- 2) 同項目では、図 3~7 で提示する話し相手に加えて、「ネット等で知り合った人」や「その他」についても尋ねているが、本稿では生徒の学校生活の内実により焦点化するため、割愛する。
- 3) 図 10~14 に重ねて、両群の「好きな授業がある」や「授業がよくわかる」についての推移も確認すると、非リスク群によって授業への肯定的な回答が見られ、中退リスク群の授業へのコミットメントが比較的低水準であったことも推察される。
- 4) 同項目は、最後の調査時点となる 3 年時 11 月 (wave11) にて用いられたものである。なおその単純集計は既出の報告書 (国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター 2017) にて確認できない項目であったため、その単純集計表を以下のように提示する。

表6 「この3年間を振り返って、ここまでやってこれたのは、誰(何)のおかげ(支え)だったと思いますか」の単純集計(%)

| | よくあてはまる | まああてはまる | あまりあてはまらない | まったくあてはまらない |
|-----------------------|---------|---------|------------|-------------|
| 部活動 (N=7874) | 31.9 | 25.4 | 14.8 | 28.0 |
| 学校行事 (N=7876) | 19.8 | 39.0 | 26.1 | 15.1 |
| 授業(学校の勉強) (N=7864) | 13.5 | 39.3 | 31.9 | 15.4 |
| 友人関係 (N=7884) | 53.5 | 37.3 | 6.3 | 3.0 |
| この高校の先生 (N=7856) | 19.3 | 39.5 | 27.3 | 13.9 |
| 家族 (N=7849) | 44.7 | 37.6 | 12.8 | 5.0 |
| 将来の夢や目標 (N=7844) | 31.3 | 41.3 | 19.8 | 7.6 |
| その他 (N=1789) | 9.2 | 11.0 | 12.0 | 67.8 |

謝辞

本稿は、国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センターのプロジェクト研究『質問紙調査結果に見る我が国児童生徒の意欲・態度等に関する調査研究』高校生追跡調査分析チームにおける研究活動の一環として、特別にデータの貸与を受け、執筆されたものです。また本稿の投稿プロセスにおいては、2名の匿名査読者から非常に有益な査読コメントを頂戴しました。記して感謝申し上げます。なお本稿の誤りは、すべて筆者に帰するものであります。

(受理日：平成30年3月19日)